息子と男同士の酒を酌み交わしたキャンピングカーの旅

『RV&キャンピングカーガイド』
編集長 町田厚成

親子の断絶を乗り越えるために

それまで素直に親の言うことを聞いていた子供が中学、高校に進学したとたん、コミュニケーションが途絶える…話が合わなくなる…わけの分からない友達づきあいが増える…外泊が多くなる…といった悩みを抱える家庭はよくあると思います。

わが家にもまさにそういう事態が訪れました。高校2年になって急に親に冷淡になっていく息子に対し、家内などは「子供が何を考えているのか全く分からない」と嘆く日が続きました。家内ばかりでなく、私もまた、仕事にかまけて息子とろくに話す機会がないような生活を3年間続けておりました。

このまま放っておいていいものか。しばらく悩んだ後、私は久しぶりに息子と一緒に旅行をしてみることを思いつきました。

当時、私はキャンプ場ガイドの編集部に務めておりました。企画さえ通れば、自分で好きな場所を自由に取材することができたのです。そこで「キャンピングカーで楽しむ北海道の旅」という企画を思いつき、それに息子を同伴させようと考えました。

当然、会社には内緒でした。今までは、仕事に家人を伴うなんて言語道断という意識だったのですが、仕事と子供との付き合いを天秤にかけた場合、「もうこの子供とつきあえる時間も残り少なくなっているのかもしれない…」と思い、むしろ仕事を手伝わせるぐらいの気持ちの方が、息子を誘う理由にもなると考えたのです。

幸い、息子はキャンピングカーの旅には良い思い出をたくさん持っておりました。彼が中学校に入ったときに、わが家は1台のキャンピングカーを購入し、それに乗っていろいろなキャンプ場を回ったりして楽しんでいたからです。

果たして、この企みに息子が食いついてくるのか不安でしたが、「仕事を手伝えば日当を払ってやる」という条件に反応したのか、夏休みになって暇を持て余していた彼は、不承不承ながらも久しぶりの親との旅行に承諾したのです。

装備の使い方を教えることで会話を回復

こうして苫小牧を起点に、登別～石狩～ホロベツ原野～稚内～宗谷岬～富良野～愛別～さらべつ～襟裳～八戸～八幡平…という約三週間行程の旅が始まりました。

しかしながら、久しぶりに同乗する息子といったいどんな会話を交わしたらいいのか、旅を始めた最初の頃はかなり戸惑ったのも事実です。髪の毛を赤く染め、耳にピアスをはめ、助手席のダッシュボードに足を投げ出してだらしなく漫画ばかり読みふけっている

息子に内心かなり腹を立てたりもしました。

しかし、ここで怒ったら終わりと忍耐強く堪え、まずキャンピングカーのコマゴマとした扱い方を教え、3ウェイ冷蔵庫の切り替え、ベッドメイキング、ジェネレーターの使い方、AC電源の接続の仕方などを教えながら、宿泊するごとにやらなければならない仕事を私がいない時も一人でこなせるように訓練しました。仕事先で撮影するときは、カメラのレンズ交換や掃除、撮影機材などの運びもやらせました。

やがて助手として一人前に認めてもらったという充実感が彼に芽生え始めたのか、次第に今まで経験したことのなかった2人だけの新しいコミュニケーションも生まれ始めました。

心地よい緊張が持続する毎日

キャンピングカーの旅というのは、どこで泊まろうが自由自在。… ということは逆にいえば、その日の宿泊の企画を真剣にクリエイトしていかざるを得ないということでもあります。旅の疲れを癒す温泉を探し、夜の食材を確保し、安心して眠れる場所を探す。あらかじめ予約を入れる旅館やホテルと違って、その晩をどう“創造”するかという緊張感が常につきまといます。

それが息子にとっては日常生活とはまったく異なった新鮮な体験だったのでしょう。一日の仕事が終わると2人で地図を検討し、どんな夜を過ごすか真剣に討議しあいました。人里離れたダム湖のパーキングで真っ暗な闇を経験し、電子レンジで温めたチャーハンでささやかな晩餐を楽しむ。あるいは名前も定かでない小さな町の駐車場に停め、地元の人しか訪ねない淋しい居酒屋ののれんをくぐる。そんな体験の積み重ねが息子にはとても楽しかったようです。

襟裳岬の漁師町で泊まったとき、私たちは駐車場にクルマを止め、近くの居酒屋に繰り出しました。そこで酔って少し盛り上がってしまった私は、未成年の息子を引き連れて、その隣りにあったカラオケスナックに入りました。もう夜中の1時を回った時間帯。隅のボックスでは、息子と同じぐらいの若者たちが飲んで、歌を唄い、騒いでおりました。そのうち、彼らは一斉に立ち上がり、みな顔をきりりと引き締めながら、次々と店を出ていくのです。

店のママさんの話によると、彼らは若い漁師さんたちでした。スナックで集合し、少し歌を唄って元気をつけ、それから早朝の海に漕ぎ出していくのだそうです。その話を聞いたとき、息子の目が輝いておりました。最初はただ騒いで唄っているだけの自分と同じ年格好の若者たちが、実は深夜も働く漁師たちだった。そこで見た光景は、ただ遊ぶことしか考えていなかった彼に、何かインパクトを与えたようでした。

冒険の匂いが漂う旅の楽しさ

北海道の奥地には至るところに「熊出没注意」という看板があります。熊が出るかもしれない荒涼とした場所で泊まる夜、頑丈な壁に囲まれたキャブコン型のキャンピングカーは、息子にとってどんなに心強かったことか。眠くなるまで、車中では、私はひたすら酒を飲み、息子は漫画を読みふける。男同士のコミュニケーションはそれでも充分なのだな… と思いました。

こうして3週間の旅を終え、私たちは帰途につきました。私には分からなかったのですが、家内は久しぶりに帰った息子の顔を見て「なんだか、すごく大人びた表情になった」とびっくりしておりました。

キャンピングカーがもたらしてくれた親と子のコミュニケーション。この旅は一生私たちの思い出に残るものと信じております。